C－44　パーソナル・カラーの研究（第４報）　流行色との対応

東京家政学院短大　今井弥生

目的　服装における色彩の演出には個々に特有な演出の仕方があり、それがパーソナル・カラーであるといえよう。パーソナル・カラーが幼児期・児童期をへて青年期までに、どのように形成されていくかという問題は第３報までに述べた。本報では社会現象の一つである流行色と対応させ、関心のもち方、個体の動き、その年代などを考察し、服装デザイン指導上の基礎情報をえることを目的とした。

方法　被験者は東京23区に居住する東京家政学院中学生225名が同高校をへて、同学院の短大生となる。その被験者一部を含む285名（出身地都内117名、市140名、郡28名）を対象とした。調査は標準色票142色を用い質問紙法とし、調査時期は1965～'74年の毎年11月に実施した。色彩の観察はJIS Z 8723に従い、分類はJIS Z 8721と8102に準じた。流行色の情報は日本流行色協会の主にファッション・カラー・トレンズなどを用いた。

結果　青年前期・中期のパーソナル・カラーは独自性（生得的）共通性（学校環境的）発達性（年齢的）の要素が形成過程に含まれていく。さらに青年後期では同系統のくり返し、補色関係、強さ一柔らかさなどの特性が見られ、その特性が、流行色傾向（1965年秋冬のジェンティール・トーン、'70年秋冬ニュー・カラー・スペース、'74年秋冬モダン・ダイナミックス）と類似した時に追従する傾向がある。したがって青年後期のパーソナル・カラーは多様性（ファッション的）要素が含まれていくと考えられる。